

地心造



三三二号

祥二

心の距離

丸岡 稔

今年も間もなく8月15日がやって来ます。73年前のこの日、私は神戸の垂水にあった、海軍士官養成の学校の校庭で、敗戦の放送を聞きました。17才でした。その数日後、絶望と不安とやり切れない気持ちを抱えて、炎天下の故郷に帰って来ました。丁度2年前、母が病気で亡くなっていましたが、こんな私を、父は温かく迎えてくれました。生きる目標を持てないまま、家の畑仕事や、父の実家が農家で、男手は全て戦争に取られて、老いた伯母と、やがて夫の戦死を知らされる嫁で守っていた田畑を手伝っていました。

そんな時、我が家の隣の大きな養蚕長屋の2階に東京から疎開していた小学2年生のH君と出会いました。まだ心細さから抜け切っていない彼は、やがて私の姿を見ると飛んで来て、いろいろと話をするようにしました。元々人懐っこい性格だったので、私は家にあった本を読んで聞かせたり、一緒に絵を描いたりしました。殊の外、彼が喜んだのは、エドガー・ポールの短編小説でした。

彼との交流の中で私は将来への目標を見つけることが出来て、仕事の合間には、来年の旧制新潟高校受験を目指し、勉強を始めました。彼も私の傍らで学校の本を拡げ、いつの間にかそのまま眠ってしまうことがよくありました。彼とのそんなつき合いの中、次々と

仲間が増えて行き、休みの時は一緒に海に遊びに行ったり、夜はわが家の2階で勉強を見てやったり、今の塾のようなしかし楽しい時間を過ごすようになりました。翌年、私は目指した学校に入学し新潟で住むことになるのですが、休暇で帰省する度に、勉強会は毎日のように続けました。H君は誰からも愛され、ムードメーカーのような存在でしたが、間もなく東京に帰る時が来ました。

昭和23年3月。H君と別れて1年以上経っていましたが、子供会はずっと続いていて、彼らの発想でいろいろな催しもやれるようになっていました。そんな時、東京の国分寺に住んでいた長兄の誘いで4人の子供達を連れて、まだアメリカの占領下だった東京に見学旅行に行きました。H君に会いたいというのがみんなの希望だったので、彼の家を訪ね、ご両親の許可を得て、一緒に行動することが出来、夜は兄の狭い家に雑魚寝をしました。あの時の子供達の喜々とした顔と姿を今もはっきり覚えています。

H君と会ったのはこれが最後だったのですが、子供会は、グループの中にリーダーが生まれ、昭和24年、私が仙台の大学に入って故郷と遠くなった後も、数年続きましたが自然消滅の形で終わりました。そして先日、ある人から、H君の手紙を見せてもらうことが出来ました。奥さんを亡くされ、自分も病気がちで、一人ぐらしをしているが、昔が懐かしい。疎開先では「丸岡さんに大変お世話になりました」と書いてあったからなのでした。私は、早速、手紙を書き、それこそ、敗戦後の虚脱状態から立ち直れたのはH君と出会ったおかげであることと、これから又一緒に頑張っていくと、自分の思

いを伝えたのです。そしてこの5月、彼からの返事が来ました。「ご返事遅れてすみません。懐かしい記憶が次々と湧いて来て、しばらくは昔に浸ってしまいました。国分寺だったのですね。場所は忘れてしまったのですが、お兄さんの家に泊めて頂いた事は今でもよく覚えています。実はこれがお会いした最後ではなく、その後昭和26年私が中学1年の夏休み、乙の伯父の家に遊びに行った時、キャンプと一緒に連れて行ってもらったのです。鷹ノ巣だったと思います。が、これがお会いした最後でした」ここまで読み終え、確かにそうだったと、その時のことが鮮やかに思い出されました。

いつか会いたいという申し出に、自分は胃がんを初めいろいろな病気を抱っていて遠出が出来なくなったことや外泊が叶わなくなったことなど書いてありましたが、それでも定年後に俳句を始め「これからも吟行をして自然の風景の句を作って行こうと思っています」と書いてあり、3月29日皇居東御苑に行った時の句が書いてありました。その中で私が一番、いい句だなあと思ったのを紹介します。

本丸跡 飛花を児が追い風が追い

この句、手紙の字、語り口、そこに正にH君が息づいているのを感じました。彼は私が初めて出会った時のままの心を持って成長し美しく老いているのを感じました。僅かな交流の期間、そして70年に及ぶ音信不通の期間を経ての再会。この70年の距離は何だったのか、まるでそれは0に等しい。H君と私の「心の距離」という言葉があるとすれば、それは0に等しいと言わざるを得ないのでした。